

今日のみ言葉 250 「 霊に蒔く 」 2015.5.13

人は自分のまいたものを、刈り取ることになる。...

霊にまく者は、霊から永遠のいのちを刈り取る。

わたしたちは、善を行うことに、うみ疲れてはならない。

たゆまないでいると、時が来れば刈り取るようになるからである。(ガラテヤ書6の7-9より)

A man reaps what he sows.
The one who sows to please the Spirit, from the Spirit will reap eternal life.
Let us not become weary in doing good,

私たちは意識的、無意識的を問わず、絶えず何かをどこかに蒔いている。すでに乳児として生まれたときから、その天使のような笑顔は、母親や周囲の人たちに何か清いもの、愛すべきものを知らせ、汚れなきものを蒔いている。

そして学校に行けば、友だちや教師たちは子供の心に次々と新たな考えや、友情、あるいははじめに遭ったりすれば、悲しみや憎しみ、怒り等々の感情をみずからの心に蒔いていくし、テレビ、インターネット、ゲームなどによって有益な知識や考え方も蒔かれることもあるが、有害なものもたくさんその心に蒔かれていく。

私たち自身も、また、人生の旅路のなかで周囲の人々に善きもの、悪しきものなどさまざまなものを蒔きつづけている。

多く人は、ボランティアなど何か善いことをして、良き種を蒔きたいと思っているであろう。しかし、現実の世の中は、いくらよいことをしようとしても、それをつぶそうとする力が必ず働く。善きことを行なっても、かえって悪口、非難の言葉がなげかけられたりすることもある。それで続けるのが困難となる。

上にあげたみ言葉は、人間の自然のままの心や考えによって蒔くのではなく、霊に蒔く すなわち聖なる霊によってうながされ、聖なる霊のために為すときには、その聖霊から、永遠の命を刈り取るということを示している。

真によきことの前に、神は壁を置きたもう。それが本当に純粋な意図でなされているかどうか問われている。いかに結果はわからずとも、善きことを続ける それは、ただ神のみを見つめて生きるときに初めて可能である。それが、霊に蒔く ということである。まず神の国と神の義を求めていくということである。

神のみ、聖霊の助けだけに寄り頼んで 物事をなすとき、いかに小さきことであってもその小さなことを、主が用いてくださる。特別にすぐれた能力もなく弱い体であっても、だからこそ、弱い人たちへの共感をもって人知れず他者のことを思い起こして祈ること それもよき種を蒔くことである。周囲の自然を見て、その美しさや力、清さに触れて神を賛美し、感謝する そしてそのような清さ、力が自分にも周囲の人たちにも与えられるようにと願う そのような心でこの世を歩めたらそれも小さな良き種をこの世界に蒔きつつ歩むことになる。



ツガザクラとは、ツガの木の
ような葉をした桜のように美
しい花、という意味。赤色のツガ
ザクラが多いので、このような
名がつけられたと思われます。

ツガ、またはコメツガという
木は、四国や関西の高山にも見
られ、徳島の剣山の頂上に近い
地域でも見られます。高さは30
mにも達する大木となることも
あります。（クリスマスツリーに使
うモミの木もこの近い仲間）

そのツガの葉とよくにている
こと、そして花がアオイ（薄
緑色）（*）なのでこの名があり
ます。

（*）アオという言葉は、現在の青色
だけでなく、緑色にも用いたので、草
が青々と繁ると言ったり、植物名にも、
庭木にも植えられるアオキは枝が緑色
なのでその名があるのもその例です。

このアオノツガザクラは、日
本の代表的な高山植物の一つと
言われますが、一般の人 とく
に近畿、四国、九州などに住む
者にとっては、近辺の山々に登っ

ても目に触れる機会がなく、なじみのないものです。これは、高さは、10～40cmと
小さく、この写真のものも草のように見えますが、樹木の仲間で、ツツジ科の植物
です。

そして、この植物が分布しているのは、本州の中部以北の高山や北海道、さらに千
島、アリューシャン、アラスカといった厳しい過酷な気象条件のところでは

この花は、つぼみではなく、このように花びら（花冠）の先を小さくつぼめた形で、
身近なアセビやネジキ、あるいはドウダンツツジのような壺形のツツジのなかまで
す。

これは、真夏の大雪山の主峰旭岳の標高1700m付近での撮影で、7月下旬であつた
けれど、付近にはまだ残雪が一部残っていたような地域です。

樹木といっても、このように野草にまじって静かに咲くものもあれば、100mにも達
する巨木もある、というように実にさまざまです。そして、この花は、あえて寒さ
の厳しい条件に育ち、樹木とは思えないような小さい姿に可憐な花を咲かせる 神
の創造の驚くべき多様性をここにも感じます。

高山の厳しい状況には、低山にない気品ある花々も多く、人間も厳しい状況のもと、
神の導きによって生きてきた人たちは、自分中心に生きてきた人とは異なる雰囲気
があるのを思いだします。

他方、路傍の雑草といわれるような野草であっても、その小さな花をルーペで見
るときには驚くべき繊細な美を持っているものもしばしばあり、神の御手による自然
のなかには、見る目を持つてみるには、その背後に神の深いお心を感じ取るこ
とができます。主イエスが「野の花を見よ」（マタイ福音書6の28）といわれたの
もそうした意味があると思われます。

（文・写真ともT.YOSHIMURA）